

Educo

地球時代の教育情報誌 エデュコ

NO.9 / 2006年 冬

心にクッションをもった人間を
育てていってほしいですね。

🌍 地球となかよしインタビュー
歴史や文化の違いを乗り越えて

中野良子 2～3

知っておきたい教育NOW

中央教育審議会で議論されていること 常盤 豊 4～5
小学校英語必修化論争を検証する 松本 茂 6～7

有田和正のおもしろ授業発見!

8～9

地球となかよしトピックス 自然・伝統・環境技術の共生 稲本 正 10～11

インフォメーション 北から南から 12～13

BOOK REVIEW 14 / コラム 10代心のカルテ その 香山リカ 15

わたしの「地球となかよし」メッセージ 2005 入賞作品発表 16～19

ほっとな出会い 中村芝雀 20





地球となかよし
インタビュー

歴史や文化の違いを乗り越えて 中野良子さん（俳優）

中国と日本では、考え方、心の尺度も歩む速さも、経済格差も、かなりの幅があるんですね。理解しがたいこの幅は、日本人の予想以上に大きいと感じます。

中野さんが中国とかかわることになっ
たそもそのきっかけは何でしょうが。

一九七九年の夏、私がヒロインを演じた映画「君よ憤怒の河を渉れ」が中国で公開され、大ヒットしているというニュースが舞い込んできました。中国全土で数億人が映画館や公民館に押し寄せているというのです。

その年、この映画を制作した大映の呼びかけで、私は日本映画祭代表団の一員として訪中することになりました。北京に第一歩を踏み入れると、まず毛沢東の大きな写真が目飛び込み、人々はみな人民服を着ていて、まるでモノクロの世界のようでした。我々をひと目見ようと押しかけた人々のうねりのような歓声とドラの音が鳴り響いていました。

俳優としてはうれしい反面、初めて隣に広大な土地をもった極めて人口の多い国があることを実感し、我々はほとんど交流のないまま生きていることに気づかされたのです。そこで、これを機会にまず中国の人々と交流を自分なりに深めていって、日中友好の橋渡しをしたいと思いました。

南京の虐殺記念館を見て大きな衝撃を受けられ、日中友好への思いを深められたと聞きました。

国連の国際平和年（一九八六年）に、第二次大戦戦没者追悼訪中団のゲストとして、南京市にある南京大屠殺記念館を訪れました。日本の広島や長崎、知覧町のような戦争記念館だと思っただけですが、そこで第二次大戦の強烈な映像を見ることになるのです。まず、入口の看板の「屠殺」という文字を見てショックで全身が固まり、一歩庭に入れば戦場がリアルに再現され、骸骨の山があるんです。そして日本軍による惨殺場面の映像…。想像を絶する悲惨な状況が次々と火のついた矢のように心臓につきささってきました。

衝撃のあまりその場に立っていられなくなってしまうことが、北京に戻ってから、すっかりなくなってはいけなくて気を取り直し、「よし！これと正反対の未来を築いていこう。二度と過ちが起きないように」と心に誓って、この記念館の隣に、本当の日本人の姿を伝える施設をつくりたいと強く思いました。

そういう中で、小学校建設の話がもて上がったのですか。

それから十年近くたった頃、中国対外友好協会の方と「終戦五十周年に、何か記念に行事ができるとうれしいですね」と話している時、「学校建設はどうですか」と提案されたのです。

そんな大それたことは考えたこともなかったので即答できず、とりあえず宿題にしてもち帰りました。帰国してからも過去の歴史のことなど両国にとってデリケート

な問題もあり、いろいろ考えたのですが、最終的に、学校建設は私が国際交流の場でずっと抱いてきたテーマ、学び合う」と共通している」とに気づきました。お互いをよく知らないということですが戦争を生む一つの要因で、平和を築くためにはどうしてもお互いに理解することが必要になってくる。理解し合うためには、まず相手について知ることが第一歩なのだという結論に至ったのです。

そして、一九九五年に中国側と共同で、秦皇島に世界に一つだけといわれた太陽熱吸収型の小学校を建設したのです。



中野良子さん プロフィール

愛知県生まれ。1971年NHKの連続ドラマ「天下御免」に出演、一躍人気スターとなる。

1979年映画「君よ憤怒の河を渉れ」「お吟さま」が中国で上映、人気を博す。

1994年フランス各地で「日本女性の昨今」をテーマに講演。1995年外務省と共催で文化大使として、アメリカ各地で日米の理解促進に貢献。1995年中国と太陽熱吸収型の小学校を共同建設。国際交流、平和活動に力を注ぐ。

現在、俳優としての活動と共に「心の豊かさ」と自然」「世界の中の日本の魅力」などをテーマに、講演や執筆活動を行っている。

著書に『星の詩 国際交流への芽生え』（NHK出版）がある。

その秦皇島
中野良子小学校
の子どもたちとの
交流は今も続いていますか。

一昨年、中国で人気の「芸術人生」という番組に出演した時、校長先生と学校をつくった当時小学校一年生だった生徒



太陽熱吸収型の秦皇島中野良子小学校

さんがゲストとして訪ねてきてくれました。私には知らされていなかったのですが、その時はもうびっくりして涙が止まらないうほど感動しました。遠く離れていて、かなりの時間と費用がかかりますし、度々訪問することができないので、向こうからわざわざ訪ねてくださったのです。今後、日本の学校と交流できるというなど考えています。実現できれば、国際交流のベースックなやりとりが子どもにも根づいていくと思つんです。さらにアメリカも含めて、日中米のラインの中に学校交流を考えていけば、とても日本らしくていいじゃないですか。韓国やロシア、東南アジアも含めて考えたいですね。世界各地の人とお互いの生活や文化を肌で感じる交流の場を、年に一回でも持つことができれば、そこで大切なことを

学ぶことができずよ。小学六年くらいでそういう体験をすると、子どもたちの目の輝きが違ってくるんです。また、そういう兄や姉を見ている弟や妹は、その変化を敏感に感じると思つんです。それは地域や学校の教育にも循環していくはず。ぜひ実現させたいですね。



反日感情が根強い中国と交流する中で、最も苦労されたことはどんなことですか。

中国と日本では、考え方、心の尺度も歩む速さも、経済格差も、かなりの幅があるんですよ。理解しがたいこの幅は日本人の予想以上に大きいと感じます。まず、そのことを認識する必要があるんです。中国は自分の足で歩いてみないと理解できない国です。実際に役立つ情報は、待っていても得られません。現実には飛び込み、身をもって探す。そこから本当の国際交流が始まるのです。

電化製品に囲まれて人工的な環境の中で育つた人間と、十時間歩かないと人に会わないような暮らしを子どもも時してきた方たちと、いざ何かを判断しようとした時に意見が食い違うのは当たり前なんですね。自分で実際に経験や体験をして、多少痛い思いをして、その上で大事なことを伝えてはじめて説得力が出てきて、やっと光が少し見えてきます。

でも、それだけではやっていけません。常に百年先、千年先も通用するであろう理想を心もって、それを失ってはいけません。それが中国の人と心を通わせる重要なキーワードなのです。

国際間にはどうしても溝があるものなんです。その間に新しいものを構築す

ることが大事です。経済界では、近年中国に目が向けられ、新しい時代が始まりました。本当はその時、日本は老若男女いろんな立場の人が、積極的に溝を埋める何かを構築する必要があったのですが、後手後手に回ってしまっただけですね。

私は俳優としての永年の経験から、国際的な場で平和文化を推進するためには「三方の眼差し」をつましく調和させることがとても大事だと考えています。

第一の眼は、自分の心の中を見る眼。自分が存在するために自分を見つめ、分析する眼。他人に怒りを覚えた時、その原因まで掘り下げてみる。自分たちは何をしたいのか、なぜこれをしなければならぬのかという自己分析ですよ。

第二の眼は、相手の心の中を見る眼。相手の立場に立って違いを知り、それを超えて分り合おうとする前向きな眼。他人からいやなことをされた時、なぜその人がそうしたのかを考える。

第三の眼は、宇宙から地球を見る眼。自分の国や地域からの視点ではなく、宇宙から地球全体を見つめる眼です。これはお互いが危ない方向へ行きかけた時に引き戻してくれる力にもなります。

人間は子ども時代の最も敏感な時に受けた感性は、なかなか変えられるものではありません。ですから、小学校までの家庭や社会環境、教育が、国際交流や平和文化のためにもっとも大事だと思います。ぜひ、心にクッションをもった人間を育ててほしいですね。

日本の教育や子どもたちの現状についてどのようにお感じになっていますか。

私は日本のいろんな地域社会を見てま

ています。リュックを背負って鈍行列車に乗って旅をしながら、その土地の歴史や文化や人々の生活を見て歩くのですが、ある町で夜の九時過ぎに、真っ暗なビルの前でダンスをしている子どもたちを見かけました。仕事や学校の帰りで疲れているだるうに、目がキラキラ輝いているのよ。この光景を見ていて、日本の学校や社会はこの子どもたちの情熱を受け止めきれないんだって感じました。

今の日本はあまりにも刺激が多く、しかもそれがバラバラに子どもたちにかぶさっていると、一体何がよいのかという道が見えないんですよ。歩こうとする右からも左からも刺激があり、先生によってよいというものがない。テレビや雑誌はまた違った刺激を流すですよ。目に見えないけれど、子どもは渦の中に巻き込まれていて、これからどういう子が育ってくるんだろって心配です。

北欧やアメリカには、小学生から演劇科のような心の働きを学ぶための時間があると聞きます。表現や相手の心をみる、先ほどの三方の眼差しを当り前のように学んでいます。世界の子どもたちは小さい時から何十人かの前でも自分を生き生き表現することを学んでいるのに、日本の子どもたち、特に我々世代は先生の号令がないと発言してはいけないとか、先生の真似をしないといけない世界でしたから、この違いは大きいですよ。

ですから、これからの時代は小学生の時からもっと才能を広げていく必要があると思います。何かひとつに偏ることなく、バランスのとれた物の見方を身につけることが必要になってきますし、その意味で先生の役割は重要です。子どもたちのエネルギーがほとばしるような環境をつくってあげてほしいと思います。

中央教育審議会で 議論されていること



文部科学省初等中等教育局教育課程課長 常盤 豊

中央教育審議会は、平成17年10月26日、「新しい時代の義務教育を創造する（答申）」（以下、「答申」という）を決定した。

同年2月に、文部科学大臣から、

義務教育の制度・教育内容の在り方

国と地方の関係・役割の在り方

学校・教育委員会の在り方

義務教育に係る費用負担の在り方

学校と家庭・地域の関係・役割の在り方

についての検討要請を受け、審議を進めてきた結果を取りまとめたものである。

答申では、義務教育費国庫負担制度の扱いが大きな議論を呼んだが、国の三位一体の改革の議論の中で、国庫負担制度は堅持すること、負担率を三分の一に引き下げることが決定されたのは、新聞報道等により、既に読者ご案内のとおりである。

本稿では、この答申で提言された、教育内容の改善に関する基本的な考え方、及びそれを踏まえて引き続き検討が行われている教育課程部会（以下、「部会」という）の審議の状況について、ご紹介することとしたい（詳細は文部科学省ホームページ参照）。

確かな学力の育成

学校教育の目的については、答申では、一人一人

の国民の人格形成と国家・社会の形成者の育成の二点を挙げていますが、これは義務教育に限らず学校教育に共通する目的である。

また、「確かな学力」を育成し、「生きる力」をばぐくむという現行学習指導要領の基本的な考え方は、今後もし引き続き重要である」との基本的な考え方が示されたところである。

ただ、部会では、子どもたちの自主性を強調するあまり教師が指導を躊躇する状況もあったのではないかとといった指摘もあり、現行学習指導要領のねらいを実現するための具体的な手立てについて議論している。

この「確かな学力」の育成については、答申では、「現行の学習指導要領の学力観について様々な議論が提起されているが、基礎的な知識・技能の育成と、自ら学び自ら考える力の育成とは、対立的、二者択一的にとらえるべきものでなく、総合的に育成することが必要である」と指摘されている。

このことを踏まえて、部会及び専門部会では、**確実な定着を図るべき知識・技能とは何か**
その知識・技能を実社会で活用するために必要な力とは何か

について、改めて議論するとともに、両者の内容及び相互の関係を明確化することによって、「確かな学力」を育成するための具体的な道筋を明らかにしよ

うとの検討を行っている。

また、学習や職業に対して無気力な子どもたちが増えているなかで、学校教育を進めるに当たって、児童生徒に、自己と他者、個人と社会との関係を視野に入れつつ、自己の学習や生活の在り方を考えさせることで、学ぶことや働くこと、生きることの尊さを実感させる教育を充実し、学ぶ意欲を高めることについて検討している。

さらに、学校と社会との関係をより緊密化すると観点から、社会の側にも教育に参画することが期待される場所であり、そのための具体的手立てに関する議論を行っている。

学校教育の質の保証

答申では、義務教育の構造改革が必要であるとの観点から、

目標設定とその実現のための基盤整備を国の責任で行った上で、

市区町村・学校の権限と責任を拡大する分権改革を進めるとともに、

教育の結果の検証を国の責任で行い、義務教育の質を保証する構造に改革するべきであると提言している。

部会では、こうした枠組みに基づき、教育課程について、

到達目標の明確化

情報提供その他の基盤の充実

教育課程編成に関する現場主義の重視

教育成果の厳格な評価を行うこと
について議論されている。

の評価には、答申において提言されている全国的な学力調査が含まれるが、この点については、専門家検討会議が設置され、結果公表の在り方など実施方法等について、検討を開始している。

教育内容の改善・充実

具体的な教育内容の改善・充実については、文部科学大臣の審議要請において、

社会の形成者としての資質の育成

豊かな人間性と感性の育成

健やかな体の育成

国語力の育成

理数教育の改善充実

外国語教育の改善充実

という六つの課題を検討することが求められている。

答申では、「国語力はすべての教科の基本となるものであり、その充実を図ることが重要である」、「科学技術の土台である理数教育の充実が必要である」、「小学校段階における英語教育の充実が必要である」、「など」と提言している。

部会及び専門部会では、こうした基本的な考え方を踏まえて議論を行っている。国語を例にとつて、ご紹介する。

まず、知識・技能の面では、「小学校段階においては、読むことについて体験的に身に付けるために、音読や暗記・暗唱が指導上有効である」、「国語に関する知識を実生活において活用するために必要な技能として、描写、要約、説明、記録、報告などの基礎的な言語活動を行う力を確実に身に付けさせる必要がある」などの意見が出されている。

思考力（感性）・判断力・表現力等については、「児童生徒の社会的自立のために必要な力として、例えば、文章や資料を読んだうえで、A4一枚（1000字程度）で自分の考えをまとめて表現することができ力を身に付けさせることなどが重要である」などという意見がある。

意欲・関心・態度の面では、「朝の読書や学校図書館の充実などにより、幼少期からの読書習慣を確立する必要がある」などとの意見が出されている。

また、小学校段階における英語教育については、部会及び専門部会での議論では、近隣諸国の状況等を踏まえて、例えば、「国家戦略として取り組む必要がある」、「小学校段階は音声やリズムを柔軟に受け止めるのに適している」などの意見がある。一方で、「小学校段階では国語力の育成が重要である」との意見もあることから、小学校段階における英語教育については、「言語力の育成との関連を検討するとともに、教育目標や内容、開始学年、教材や指導者の確保等の条件」について具体的な検討を行っている。

総合的な学習の時間など

総合的な学習の時間については、答申では、「思考力、表現力、知的好奇心などを育成する上で総合的な学習の時間の役割は今後も重要」だが、「授業時間や具体的な在り方については、各教科との関係を明確化するなど改善を図ることが適当である」と提言された。

部会においても、総合的な学習の時間において育成したい力を明確にする観点から教科等との関連について改めて整理する必要がある、優れた先進事例の情報提供など学校への支援策を講じる必要があるなどの議論が行われている。

なお、各教科等の授業時数の在り方については、教育内容の在り方に関する議論、各教科等専門部会での検討などを踏まえ、教育課程部会として、今後引き続き各教科等を見渡した立場で総括的に審議を行うこととしている。

学校週5日制

学校週5日制については、答申では、「学校週5日制についても、学校、家庭、地域の三者が互いに連携し、適切に役割を分担し合う」という基本的な考え

方は今後も重要であり、それを基本にしつつ、地方や学校の創意工夫を生かすことについて、今後さらに検討する必要がある」と提言した。

部会においては、地域の人材や専門家など学校外の人材の学校教育への参画といった観点から議論が行われている。

【資料】学習指導要領の見直しに当たったの検討課題

1	「人間力」向上のための教育内容の改善充実 社会の形成者としての資質の育成 豊かな人間性と感性の育成 健やかな体の育成 国語力の育成 理数教育の改善充実 外国語教育の改善充実
2	学習内容の定着を目指す学習指導要領の枠組みの改善 各教科等の到達目標の明確化 国民として共通に必要な学習内容の示し方 授業時数等の見直し
3	学ぶ意欲を高め、理解を深める授業の実現など指導上の留意点 個性や才能を伸ばす教育の推進 補充的な指導の必要な児童生徒への教育の在り方 教科書、指導方法等の改善
4	地域や学校の特色を生かす教育の推進 地域や学校の特色を生かす教育の推進 学校と家庭、地域社会との関係の在り方



(平成17年2月、中教審総会における文部科学大臣挨拶)

小学校英語必修化論争を 検証する

「コミュニケーション教育という発想



東海大学教授 松本 茂

NHKニュースの「誤報」

平成17年10月13日に、NHKテレビは「文科省は小学校でも英語を必修とし、早ければ平成19年度から小学校三年生以上を対象とする方針を固め、明日の会議で決定する」といった内容のニュースを何度も流した。文科省はその日のうちに全国の関係機関に、NHKの報道は「事実と異なる」という主旨のFAXを流した。私はその会議（中教審外国語専門部会）の委員だが、翌日（10月14日）の会議では「必修化」について一切触れられなかったし、この原稿を書いている現在（12月中旬）においても専門部会に必修化の方針は提示されていない。

この報道以降、世間は「文科省スタッフや中教審外国語専門部会委員は、なんとしても小学校に必修科目として英語を導入しようとしている」と考える傾向が強くなったようだ。マスコミ各社が小学校英語教育論争の問題を取り上げるようになり、私のところにも「小学校英語必修化反対派」から手紙が届くようになった。しかし、現在も文科省内部では、いろいろな角度からの検討が慎重に進められている。

賛成派の議論を検証する

小学校英語必修化に賛成している人たちの議論は

概して単純であり、次のように集約できる。

- 1) 英語は重要である
 - 2) 日本人は英語ができない
 - 3) 外国語学習は早ければ早いほどよい
 - 4) 小学校で必修化すれば無理なく楽しく学べる
- 私としては、「義務教育課程において今のように英語を教える学校（地域）と教えない学校（地域）が混在するのは不公平である」といった「教育の機会均等」のほうが議論としては強いと思うのだが、こういった意見はほとんど聞かれない。賛成派の議論をあえてひと言でまとめれば、「日本人の英語力向上のための小学校英語」ということになる。こういった考えの人たちがよりどころにしているのが、言語の習得は10〜12歳を過ぎてしまうとネイティブ・スピーカーのレベルに達するのはむずかしいであろうという「臨界期仮説」である（発音に関してはもっと早い年齢が臨界期になるという説もある）。

仮説とあるように、立証されているわけではないのだが、小学校英語必修化派の人たちの間では金科玉条のごとく扱われている。しかし、この仮説は生活言語が英語という環境で、英語を第一言語として学び・使うことを目指している子どもたちを対象とした研究の中で提示されたものであることを知っておく必要がある。つまり、普段の生活の中で英語を使うことがほとんどなく、授業科目として週に数時

間程度、外国語（第二言語でもない）として学ぶ日本人生徒を対象として考えられたものではない。ただ、いわゆる帰国子女が英語をペラペラとしゃべっているのを見ると、「やっぱり英語も早いうちにやらないとダメよねえ」ということになる。よって早い年齢からの体験・学習が不可欠であるという「わかりやすい」結論に達する。

しかし、帰国子女の中にはどちらの言語も中途半端になってしまっている子どもたちが数多くいることもあまり考慮されない。また、生活言語が英語という環境の中で育った子どもと、週に数時間、教科として英語を教わる子どもが置かれている状況の違いもあまり考慮されていない。

臨界期説だけでなく、英語教育の研究校として指定された小学校で実際に「成果をあげている」ということを、早期英語教育をサポートするデータとしてあげるケースもよくある。たしかに、英語に対する積極的な態度や強い関心といった情意面と、発音の良さや語彙の豊富さという認知面に関して成果をあげているらしいが、これはごく短期間の変化を観察した結果にすぎない。そのあと何年、何十年後にどうなったかというデータはほとんど存在しない。私立の一貫校ではもう何十年も前から小学校で英語を教科としている学校が多い。そういった学校へ通い六年間にわたり週数時間英語を習ってきた生徒の英語力は、小学校時代まったく英語を学習しないで中学校から入学してきた生徒に一学期が終わる前までに追いつかれしつう程度のものである。

また、研究指定校における短期間の結果に関しては、良い結果が出るのはある意味では当たり前である。国や県から指定され、別枠の予算を与えられ、ネイティブ教員が加配され、教員たちは英語教育研修や専門家の支援を受け、結果を出すために一致団結して取り組んでいる。熱心に指導し、特別なサポートを施せば、英語に限らず他の教科であつても効

果をあげるであろう。しかし、これが全国の小学校で同時に展開されたときに同じような結果が保障できるかとなると、話は違う。

賛成派の方の中には、以上のような反論をすると、「良い結果が出なくても、害がないのならやってみよう」といった暴論を展開する人もいるくらい、賛成派の議論の根拠は脆弱であると言わざるをえない。

反対派の議論を検証する

では、反対派の議論はどうかというと、とくに説得力があるとは思えない。賛成派の個々の議論に対する反論を含め、反対派のほとんどの意見は、賛成派の考え方と根っ子の部分は同じなのである。

(1) 英語力に悪影響を与える

反対派から「日本人に英語は必要ない」という議論が提示されることはまずない。「英語は日本人に大切である」という考えは賛成派と共有している。

ネイティブ教員をすべての小学校(約2万3千校)に配置することは不可能なので、子どもに英語を教えることに精通していない小学校教員(約41万名)が英語を教えることになり、伝統的な英語指導になり、「英語嫌いを早い段階で作る」「間違った英語を身につけてしまう」といった英語力への悪影響を懸念する声が強い。

(2) 英語よりも大切なことがあるはずだ

反対派のもうひとつの代表的な意見は、「小学校段階では英語よりもっと大切なものがある」という発想である。その大切なものとは、他教科(とくに国語)のことである。しかし、英語を必修教科に指定した際には国語の時間を減らす、という話は聞かない。また、学校で週に数時間英語を聞いて話すだけで母語に悪影響があるという科学的根拠もない。一方で、他言語を学ぶことによって日本語と対照することができ、日本語の力も伸びるのではないかと

いう反論もある。日本語に対する悪影響よりはこちらの議論のほうが、まだ説得力がある。また、英語(外国語)を小学校でも教える時間を確保するために他教科の内容を精査・スリム化するのはまったく不可能なほど他の教科のすべての内容はとても重要かと問われると、それもはなはだ疑問である。

「コミュニケーション教育」の発想

これまで検討してきたことからわかることは、小学校英語教育に関する議論は、賛成派も反対派も「日本人の英語力向上」という大命題のもと、かなり視野の狭い議論に終始しているということである。

社会的構成主義の影響を受けて世界の教育界でパラダイム・シフトが起きていることに呼応し、20世紀末から日本でも子どもたちが教科書の内容および活動の場を教室から外へと拡張し、教員からのサポートを得ながら、考え、調べ、まとめ、発表し、討論することができるように「教育にゆとり」をもたせようとした。しかし、現場が教師主導型の教育から脱却できず、「ゆとり教育(本来は「教育におけるゆとり」とラベルをつけるべきであった)」が、狭い意味での学力低下をもたらした原因と片づけられようになった。このことは、英語力をあげるためにいかに効率よく指導すべきか、という観点から小学校英語必修化が論じられていることと根っ子は同じように思える。訓練としての教育に回帰しかけたところにOECDの国際学習到達度調査(PISA)の結果が発表され、フィンランドが好成績をあげ、その教育実態がわかるにつれ、「教育にゆとりを」と、つまり「生徒が共に育つ教育」という発想に間違いがなかったことがわかり、揺り戻しが起きている。

私は、このような状況に鑑み、言語に関する新しい教科を小学校に設定するのであれば「英語科(外国語科)」ではなく、初等教育の根幹として「コミュニ

ケーション」という教科を設定することを推奨したい。これは幸いなことに、文科省が全国各地の小学校を指定し、「伝え合う力の育成」に関する研究を推進していることも連動する。

教師が子どもに知識を授けるといった固定的な関係を打破し、自律した学習者を育て、クラスを学びの共同体として捉えて人間関係を大事にし、教科書の内容を実生活にいかに関係させて学びに現実感を持たせるかといったことを主眼として教育改革を推進していくには、コミュニケーション教育、つまり「言語を効率的に習得・獲得させる」という目的ではなく、人間どうしがかかわり合うことの意味、むしろ社会との関係性を作り上げる力を養成することを主な目的とした教育」を推進すべきであると考ええる。

この「コミュニケーション教育」は、国語(日本語)と外国語(英語)だけでなく、日本語で教えられる他教科を含めたすべての教育の骨幹となる教科とみなす。また、教科として導入するだけでなく、すべての教科指導においても、同様の教育理念と方針によって指導法を改善していくことが可能である。

言語や文化などに関する知識(knowledge)を獲得することに偏ることなく、他者へ配慮する、考えや価値観の違いを受け入れるといったことに関係する関心・姿勢(attitudes)、そして実際に適切な言動(behaviors)を取捨選択するといった要素を核として、シラバスを構築していく。そして、この教育の枠組みの中で、日本語がわからない外国籍市民の気持ちを理解し、関係を作ることを目的として「生活英語」の表現や発音等も、活動を通して学ぶといったカリキュラムを構築すればよいだろう。

つまり、日本人の英語力を向上させるための英語教育の施策として小学校英語必修化を捉えるのではなく、日本の初等教育全体を変える可能性のある施策として議論する視点をもってもらいたい。



有田和正の
おもしろ授業発見! ⑨

無袋りんご有袋りんご、どちらが赤い?

「りんごの袋にはナゾがいっぱい」といわせた川井孝寿先生の授業

教材・授業開発研究所代表 有田和正

1. 教師の願い

福島は、山形とならんで「果物王国」といわれ、その生産性を競い合っている。子どもたちも、福島県は梨やりんごの生産量の多いことや産地として知名度が高いことを知っている。

川井孝寿先生(福島大学附属小学校)は、このような子どもの実態をもとにして、生産農家の工夫や努力を中心に追究することで、身近な地域で行われている生産・販売活動が、自然環境を生かしたり、消費者の思いや願いを取り入れたりしながら営まれていることに気づかせたいと考えた。

今回の社会科(3年)の授業では、りんごを中心に追究を進めていく。

2. どちらが袋をかけたりんごか?

本時のねらいは、「有袋と無袋の二つの方法でつくられたりんごを比較したり、りんごにかける袋を観察したりする活動を通して、「袋かけの秘密」について自分なりの問いをもつことができる」というものである。

授業が始まったとたん、赤と黄色のりんごを提示し、「どちらが袋をかけたりんごでしょう?」と問いかける。



子どもたちは、赤い方が袋をかけていないものといった。「袋をかける」と光をさえぎられるから、赤い方が袋をかけていないものだと考えた。

ところが、6人の子どもは「袋をかけても色はつく」と強く主張し、論争になる。

論争を聞きながら、教師は、

リンゴの袋の秘密を探ろう?

と焦点化し、「りんごにはどんなちがいがあったかな?」という問題を板書した。

子どもたちは、りんごをさわりながら積極的に意見をいう。これにまた反対意見が出る。



例えば、次のような意見が出た。袋をかけても、木の下にシルバーシートをしいたりするので、色はつくという。葉をむしり取ったりして、日光が袋の上から当たるので、色がつくというのである。

いや、何といっても、太陽に当たったものが、赤くなるのが自然の原理だという。お互いなかなかの説得力である。

袋をかけたとしても、薄い袋なら色がつく。だから、袋をかけても、かけなくても、りんごは赤くなるのだ、という考え方である。

しかし、教師が提示したもう一方のりんごは、まるで梨のような色である。

子どもたちの論争が少しゆきづまりをみせ始めたとき、教師は、

実は、赤くきれいに染まっている方が袋をかけたものです。

という。

わたしもびっくり、「80ヘェ～」であった。そして、「どうして?」と考え始めた。完全に裏をかかれた。

6人は、「やっぱり」といったが、残り子どもは、「そんなバカな?」と納得しがたいという。

まさに、「りんごの袋の秘密」である。
袋と着色と日光の関係が問題になる。
わたしも、なぜかと考えるがわからない。
そのことをみこした教師は、りんごの袋を配布した。

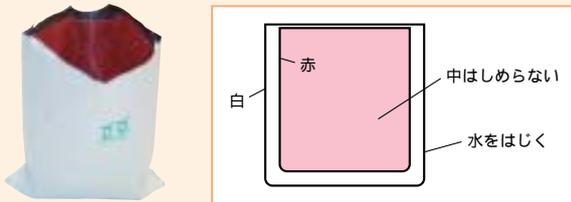
3. 袋の秘密の追究

袋をもらった子どもたちが、多様な行動を始めたのには驚いた。何と水につけてみているではないか。



水につけて、中に手を入れてみると、しめっていないという。つまり、水が中に通らない袋だという。

いや、「水もはじく袋だ」というのである。下のようにノートに書いている。



袋を「日光」にすかしてみている子どももいる。調べ方が理科的というか、科学的である。日光をみていた子どものノートには、「光は通る」と書いてある。二重になっている袋をはずして、一枚にしてみている子どももいる。

外の袋は、ミシン目が入っていて、破れやすくなっている。りんごが大きくなると、ミシン目のところで自然に破れて、日光が当たるようになっていのではないかと考えている子どももいる。

中の赤い袋は、うすくて光が通る。しかも、つるつるの袋である。だから、ある時期に外側の袋をはずせば、光が当たり、今まで日光が当たってないぶん色がつきやすいのではないかと考える。

ある時期になると葉をむしり、光がよく当たるようにする。下にはシルバーシートをしく。



袋をかけた方が色がつきやすいのは、袋をはずす時期と、葉をむしり、シルバーシートをしく時期が一緒なのではないか、とも考えた。

とにかく、袋をもう少し調べないと、袋をかけた方が色がつきやすい理由はわからないというのである。よく考えるのに本当に感心した。今から追究するつもりようだ。

4. 5 か月間袋をかけていたりんご

袋の問題が一段落したところで、突然、一つりんごを出した。それは、5 か月間袋をかけてきたままのりんごだという。



「さあ、どんな色をしているでしょう？」とにこにこして問いかけた。

袋をかけていたりんごの方が赤くなっていたから、これも赤だろうと予想した。

とり出したりんごは、何と「白」に近い「黄色」であった。

子どもたちは、「おいしいか？」と問う。教師は、「食べさせてあげようかな？」とし

らしながら、小さく切って全員に食べさせた。

早速食べて、その味をノートする。とにかくよく発言し、よくノートする子どもたちであった。鍛えられていた。





自然・伝統・環境技術の共生

エコリゾートとしてのトヨタ白川郷自然学校

トヨタ白川郷自然学校校長

稲本 正



1 学力より気力・体力の不足が問題

日本の子どもたちが、世界の他の国の子どもたちと比較してどのような状況にあるのかということとを、教育に関わる方々は考える必要があると思っています。

私は、たまたま世界二十数カ国の子どもたちと接する旅を経験することになりましたが、その中で、日本の子どもたちの良いところと悪いところがよく見えてきました。

良いところは、基本的な学力があり、もちろん識字率も高く、算数の計算もそれなりにできるところで、近年、全体的な学力の低下が話題になっておりますが、私に言わせると世界平均から比べれば、まだまだ圧倒的に上位にいます。

学力の向上だけで言えば、先進国の仲間入りを始めた国が一番伸びるというのが世界の情勢で、途上国や成熟した先進国ではそれほど高くはありません。そういった中では、学力の低下も成熟先進国になった証だと考えれば、それほど目くじらを立てるほど大変な問題ではないのかも知れません。それより、世界の子どもたちと生きた人

間として比較した時、一番問題なのは「気力」と「体力」の不足だと思います。私には、先進国に仲間入りし始めたばかりの国々や発展途上国を抜けて出そうとしている国々では、子どもたちが気力と体力に満ち溢れているように見えます。

私は、アジアの中国や韓国、北米のカナダ、アメリカ、中米、南米、ヨーロッパ諸国、ロシア、オセアニア、アフリカ大陸のそれぞれの国の子どもたちと接してきましたが、私が接した子どもたちの中に、もし日本の子どもたちを入れたらどうなるかということを考えて、背筋が寒くなりま

2 三つの「共生」をテーマに掲げて

日本がこの先、戦後の発展とは別の新しい発展の仕方をする時、一番大切なのは新しい国のビジョンを持つことです。かつては化石資源を輸入し、それを加工して輸出し、そこで得た経済力で人間生活に関わるあらゆるものを得ようと試み、それ

がある程度成功して世界第二位の経済大国になったのですが、その先のビジョンが全く見えなくなっていました。今ここで、この国の根本を見直し、新たなビジョンを描くためにも、日本人は生きることの基本を見直し、何が本当の豊かさかを見つめなおす必要があると思います。

トヨタ白川郷自然学校は、そのような状況の中で「自然との共生」「伝統文化との共生」「新しい環境技術との共生」という三つのテーマを掲げ、昨年の四月に開校しました。「自然学校」と言っても、入学式や卒業式があるわけではなく、快適な施設にゆっくり泊まって美味しい食事と気持ちのいい温泉を楽しみ、それに加えて前記の三つの「共生」をテーマにしたいくつかのプログラムを体験することができるといふ、いわば一種の「エコリゾート」です。

あらゆる学校の修学旅行や研修会、学会などを受け入れるだけでなく、家族や仲間同士での旅行などでもご利用いただける一般の宿泊施設も備えています。そういう中で、参加した人が体験プログラムを通じて、先ほどの三つの「共生」のテーマに触れることができます。

3 多様な体験プログラム

(1) 自然との共生

自然との共生では、日本三大霊峰のひとつ白山の大自然の麓に五二万坪（一七二ヘクタール）、東京ドーム四三三分の広大な敷地を抱えているため、多種多様な自然体験プログラムが可能です。

例えば、トヨタ白川郷自然学校の敷地内に生息している絶滅危惧種である「ギフチョウ」を保護し、それをさらに増やそうという試みをしています。ギフチョウの蜜源であるカタクリの花を増やし、食草であるウスバサイシンを増やしてバタフライガーデンを作るといった試みです。また、白山に棲むツキノワグマをはじめとした大型動物を完全にウォッチングできるというプログラム（ツキノワグマには発信機が取り付けられており、岐阜大学の坪田教授や「ツキノワグマ研究会」と共同で調査中）、また、広大な森林やブナの森の湧き水からできた大窪沼という自然豊かな池や湿地が



絶滅危惧種のギフチョウ



森の中の自然体験



雪の森で自然体験



燃料電池を使った環境教育

あるため、水鳥をはじめとした野鳥観察もできます。このように、森林を背景とした哺乳類、鳥、昆虫を組み合わせたプログラムは、他ではなかなか体験できないような内容になっています。

(3) 新しい環境技術との共生

(2) 伝統文化との共生
また、「伝統文化との共生」ということで、自然学校の敷地内にある、東海北陸自動車道の建設現場から出たトンネル残土が積まれた丘に、世界遺産白川郷の合掌家屋の茅葺き屋根の葺き替えで不要となった古い茅を再利用し、トンネル残土の丘を土壌改良しながら植林し、育林しています。地元の合掌集落に住んでおられる方々とも交流し、合掌家屋の建築的特性をより深く理解したり、白川郷の伝統的な「どぶろく祭り」などにも参加し、案内するといったことも行っています。昨年は白川郷の世界文化遺産登録十周年ということで、白川郷と同様に実際に人が住んでいる世界遺産の都市からゲストを招き、白川郷の合掌集落の保存と持続可能な発展のために「世界遺産フォー

ラム」も開催しました。
最後に、「新しい環境技術との共生」として、冷暖房の負荷を少しでも低減するために地中にアイスチューブを埋め、そのチューブを通じて夏には建物内の空気を冷やし、冬には地中の熱を利用して建物内の空気を暖めたり、太陽電池や風力発電の利用、そして、間伐材をペレットに加工するためのペレット製造機もあり、それを暖房用に使用しています。ゆくゆくは燃料電池なども本格的に取り入れたいと考えています。現在、子どもたちに燃料電池による実験や谷川での小型水力発電などの実験プログラムなども行っています。
トヨタ白川郷自然学校では、このような体験プログラムを通じて、日本人がこの二一世紀という環境の世紀にどのような国づくりをすればいいのかを探り続けており、このような試み、体験が、現在の日本の子どもたちに欠落している気力や体力を補うものになると考えています。

お問い合わせ

トヨタ白川郷自然学校

〒501-5620 岐阜県大野郡白川村馬狩223

Tel. 05769-6-1187 (予約・問い合わせ専用)

Fax. 05769-6-1287

E-mail : info@eco-inst.jp

URL : <http://www.toyota.eco-inst.jp/main.html>

新潟県

赤塚中学校と佐潟とのかかわり

新潟市立赤塚中学校校長
寺山正教

赤塚中学校の近くには佐潟という砂丘湖がある。かつては魚場であり、農業用水の貯水池として盛んに利用されていた。白鳥が飛来する佐潟は、1997年にラムサール条約登録湿地となり、多くの人が訪れている。

当校は佐潟を含む学校の周りの環境に触れることにより、自然環境と人とのかかわりについて、次のような取り組みを行っている。

生徒会で「佐潟クリーン活動」という環境美化活動を企画し、全校で取り組んでいる。活動内容は、佐潟周辺のごみ拾い活動と佐潟公園前の花壇整備である。

花壇整備では、咲き終わったチューリップや小石などをとり、新たに花の苗を植える。そして、佐潟周辺のごみ拾い活動を行う。ごみの中には空き缶やタバコの吸殻などが多くあり、環境問題について身近なものとして実感し、関心を高めることができる。このことが自分たちに何ができるか考え、実践できる集団づくりの一助となっている。

秋に地元主催で行われた「佐潟クリーンアップ活動」に生徒のほとんどが参加する姿が見られ、環境に対して関心が高まっていることがうかがえる。

白鳥環境愛護委員会では全校生徒や保護者に向けた環境について啓蒙を図っている。この活動のねらいは、「白鳥と環境美化を周囲の人に伝える」ために、事故で片翼を失った白鳥の保護飼育と佐潟に飛来する白鳥の数の調査、佐潟の水質調査の3つの活動に取り組んでいる。そして毎月、記録をまとめ、委員会便りとして発行している。

これらの活動を通して、故郷の環境を大切にすることを育てるとともに、故郷に誇りを持ち、次代を担う人間になってほしいと願っている。



北海道

地元大学との連携と多様な教育活動を目指して

釧路市立景雲中学校校長
近江道郎

本校は、釧路湿原を背後に控える釧路市北西部にある。「文武両道」を目指している生徒が多く、活気に満ち溢れている。例年約70～80%の生徒が部活動へ加入し、放課後でもグラウンドと体育館は、それぞれ150名程の生徒で溢れている。

本校では、一人一人の個性を尊重し、個性の伸長を目指す教育や地域に開かれ、地域と共同する教育、多様な生徒・保護者のニーズに応える特色ある教育活動を目指している。総合的な学習の時間では地域学習に力を入れ、また、年2回、PTAと生徒会が合同で登校時に通学路のごみ拾いを行うなど、地域に根ざした教育に取り組んでいる。

釧路市では、北海道教育大学釧路校と提携して、市内の各小中学校で半年～1年間、学生をボランティアとして受け入れ、地域と連携しながらよりよい教員の育成を目指している。多くの学校の場合、学校行事の手伝い、総合的な学習の時間の引率補助等、教師の補助的な役割といったケースが多いようである。

本校では、2名ずつ数学と英語の学生を受け入れ、週1回、3時30分から5時まで放課後補充学習に取り組んでいる。学生にとっては、3年時の教育実習前に、生徒へ教えることの難しさや生徒理解を体験できるので、大変貴重な機会となっている。学校としても、近年、放課後生徒と関わる時間がなかなかとりにくい状況もあり、定期的に補充学習に取り組める学生ボランティアの存在に大いに助けられている。その他、部活動指導の補助として参加してくれる学生もいる。さらに多様な教育活動の一端を担ってくれることを期待すると同時に、一人一人の生徒を大切に、より高い目標を持った教員になってくれることを願っている。



熊本県

広がるボランティアの輪

～産山村子どもヘルパー活動～

産山村立山鹿小学校校長
佐藤増夫

本村は、阿蘇外輪山の東に位置し、至るところから清流が湧き出す自然豊かな村である。また、総人口の33.5%が65歳以上の高齢者という高齢化の進む村でもある。

本校では、平成9年度から村の社会福祉協議会と連携し、一人暮らしの老人に毎週ハガキを出す「ふれあいポストカード」活動を続けている。この郵便を通じた交流は、定期的な安否確認にもつながり感謝されている。平成12年度には、もっと顔の見える交流がしたいという子どもたちの思いから、「子どもヘルパー」活動がスタートした。

子どもヘルパーは、村から任命された4年生以上の子どもたちで構成され、村の民生委員さんやシルバーヘルパーの方々の方々の支援を受けて活動している。主な活動は、一人暮らしの老人の家を訪ね、窓ふきや草取りなどを手伝う「自宅訪問」と公民館で昔の遊びやゲームをする「ふれあいサロン」である。活動を通して、子どもたちに思いやりの心、感謝の心、そして、人間としての温もりが増してきている。一方で、子どもたちは疑似体験装具を付けての高齢者体験や心肺蘇生法などの研修も行っている。これらの活動は、中学校でのジュニアヘルパー活動へと引き継がれており、子どもたちが地域に学び、地域の一員として福祉活動に参加できるよい機会となっている。

さて、「気づき・やさしさ・チャレンジ」が本校の実践目標である。昨年度から、子どもたちによる校内清掃ボランティア「ボラレンジャー」が出没し、現在大きな輪となってきている。子どもヘルパー活動を契機にボランティアの輪が確実に広がっている。



三重県

島に元気を届ける島っ子太鼓

～感性と創造性を育てる表現活動～

鳥羽市立神島小学校校長
池田裕治

神島は伊勢湾口に浮かぶ、人口約500人、周囲4kmに満たない三重県唯一の外洋型の小島である。定期船は一日4往復。人家は島の西北部の急な斜面に季節風を避けて集中し、学校だけが人里から離れた南側に位置する。また三島由紀夫の小説「潮騒」の舞台となった島でもある。

本校は全校児童数23名、複式3学級のごく少人数の学校であり、今後も児童数の減少は避けられない。本校が太鼓活動を教育課程に取り入れて5年目を迎えた。

当初はポリバケツ、流れ着いた流木やブイなどを太鼓に見立てて無邪気に音やリズムを楽しんでいた。それが素焼きの蛸壺に牛皮を張り付けた手作りの「蛸壺太鼓」に発展し、やがて和太鼓の本物の音との出会いが、子どもたちの心に火をつけた。来島された世界的な和太鼓奏者林英哲さんの生の演奏を聴いて、“本物”が子どもたちの“本気”を引き出した。

島っ子太鼓は子どもたちが見たり聞いたり体験したことを音やリズムに置き換え、全校児童が体で表現する創作太鼓である。今年は漁協の協力を得て、「せり」体験をした。それを基に、みんなで感想を出し合い、言葉にまとめ、曲の流れをイメージしながら曲作りに取り組んだ。創作曲「せり太鼓」の誕生である。

完成した曲は敬老会、天王祭、サマーフェスティバル、島民運動会等の場で地域の人たちに聞いてもらう。島っ子太鼓は島の人たちに元氣と感動を届け、子どもたちはみんなの拍手から自信とやる気もらう。

子どもたちを見ていると、神島の風土で培われた素晴らしい豊かな感性を感じる。太鼓活動を通して、学校が今までも、これからも大切にしていきたいことは、感性と創造性である。



草薙厚子『子どもが壊れる家』(文春新書)

子育ての匙加減

評者 亀口憲治(東京大学教授)



本書を読むと、両親がそろった「普通の家庭」でも、なぜ殺人などの重大な犯罪に手を染める子どもが育つのか、よく分かる。著者は少年鑑別所の法務教官としての勤務経験を持つフリースターナリストである。神戸のA少年のような社会的に注目された事件を精力的に取材している。傍目には「普通に見える家庭」で暮らしていた子どもが、実は危険な心理的環境におかれていたのである。一方では、圧倒的な親からの期待をかけられ、他方では、心の空白部分に侵入してくる強烈なゲームの刺激にはさみうちされた「心の歪み」を、彼らは人知れず経験していたようだ。

著者はこれらの取材結果から、少年犯罪から得るべき二つの教訓を導き出している。過干渉せず、子どもを自分の理想に嵌め込もうとしない、放任せず、ゲームやインターネットとの関わりを放置しない、の二点である。家族療法の実践に長く関わってきた評者の立場からすれば、残念ながら、こ

の教訓はすでに言い古されてきたことであり、予防策としては不十分だと言わざるをえない。なぜなら、すでに子育てに関心をもち、少年犯罪の防止策を真剣に考えようとしている親や一般読者にとって、「過干渉」や「放任」が良くないことは百も承知のことだからである。現実の子育てにおいては、辛さと甘さをほどよく匙加減することは、どの親にとっても至難の技である。たとえば、過干渉になることを避けようとする親は、ゲームやインターネットを厳しく制限できず、結果的に放任になりかねない。逆に、放任の弊害を恐れて厳しく制限したあまりに過干渉になることも多い。生身の子ども相手では原則論は通用せず、母親の力だけで、高度に商品化されたゲームの魔力から子どもを遠ざけておくことはできない。しかし、両親チームが力を合わせることで、わが子を「魔手」から守ることはできるはずだ。その作戦会議にもってこいの最新資料が、本書には集められている。

佐藤綾子『パーフェクトペアレント』(講談社)

だいじょうぶな子育てのための三つの力

評者 中野洋恵(国立女性教育会館研究国際室長)



子育ての不安に悩み、つらさを訴える母親が増えている。そうした母親の多くは決して子ども嫌いではなく、逆に子育ては大切だ、一生懸命にやらなければ、いい親になりたいと思っっているまじめなタイプだといわれる。

本書はこのような親を対象に書かれたものである。「いいことだけが続きとは限らないのが子育ての難しさ」で怒りの気持ちやいらだち、大人だから泣いたりできないというストレスを持った親たちが自信をなくしてしまっ。しかし、著者は不安になるのは子どもを愛しているからで、はじめから親として生まれたのではなく、必要なのは親としての自信を得るためのスキルを身につけることだという。

「いい親、いい子に縛られていませんか?」「親の資格はシンプルです」「無限大の愛こそ本当のパーフェクト」の3章からなるが、中核をなすのは「親の資格はシンプルです」。身につけるべき力として、自己肯定し自信を持つこと、切り替え上手になること、

思いやりを表現する方法を身につけることがあげられている。

「長所にならない欠点はない」「まわりと比べない」など自分を肯定的に認め、失敗に落ち込まないためには「ふっきり」や「棚上げ」が必要であると述べる。感情のコントロールと表現法として元気の出る歩き方や姿勢、そのための体操の仕方がイラスト入りで紹介されているのも楽しい。思いやりの表現方法では、親になりたい時の方法、子どもが発する体の信号を読みとる方法が説明される。そんなに簡単ではないと考えつつも「ちょっと試してみよう」、まずは「三三三」してみようか」と思えるのが本書の魅力だろう。

読むうちに、「三つの力」は子育て中だけにとどまるものではなく、実は生きていく上でのスキルにつながるものであることに気がつく。この本を読んで元気になるのは親だけではない。仕事や生活に不安や疲れを感じている人にもおすすすめしたいと思う。かくいう私もその一人、是非おためしあれ。

Column

10代心のカルテ その②

香山リカ（精神科医・帝塚山学院大学教授）



ど

うして私だけが、こんな目にあわなければいけないの...？

診察室でよく聞かれる言葉だ。特に10代の若者にとって、自分の身に突然、降りかかってきた人間関係のトラブルや感情の動揺、拒食や過食などの衝動はあまりにつらく、耐え難い。そこで、「どうして私だけが？」という叫びが口をついて出るのである。

ヨシトもそんな若者の一人だった。中学の時のいじめが原因で引きこもりになった彼は、何とか入った高校も出席ゼロのまま中退、自宅でテレビゲームをしただけの毎日を送っていた。ある日、両親のすすめで病院にやってきましたヨシトは、最初の頃、「僕は自分の意思でこういう生活を送っているのだから、放っておいてほしい」と言っていた。「好きでやっているならそれはそれでいいんだけど、もっと他のこともしたほうが楽しいんじゃないかと思ってね」と彼の言葉を尊重しながら、その閉ざされた心をノックし続けていると、ある時、彼は冒頭のセリフを叫んだのだ。

「他の子は高校生活を楽しんでるのに、どうして僕だけこんな目にあってるの？」

自

分だけつらい」というのは自己中心的な発言に聞こえるが、それは、これまで意識していなかった他者を意識するきっかけでもあり、「自分もみんなと同じよう

「どうして私だけが...」という叫び

にしたい」という意欲の芽生えてもいるのだ。こういう時に、「自分だけつらい、なんて思うのはわがままだ！ 世間にはもっと恵まれない人がたくさんいるのに」などと言ってしまっただけ、心はまた閉ざされてしまう。私も「そっだよ、あなたただ部屋の中にいるなんてホントに理不尽だよ。でも、ずっとこのままだけでいいよ、ということも出来ないよ。まず何かから始めればいかな」と、ヨシトの思いを受けとめた上で、次の展開を考えることにした。

と

はいえ、治療は順調ではなかった。「自分だけ苦しい」という感覚が、「だからそこから抜け出したい」というモチベーションにつながりかけたと思っても、世間や家族、教師などへの恨みや強い被害者意識にすぐ戻ってしまう。一進一退が続いたが、途中から何とかして「自分だけ」の状態から抜け出したい、という気持ちになりだした。次の年、ヨシトは通信制の高校に復学を遂げ、ロックバンドにも加わった。

「自分だけひどい目にあってる」。若者がこう言い出したら、私は立ち直りのチャンスが到来したと考える。少し歪んだ形ではあるが、「今の状況はおかしい」という客観的視線が生まれているからだ。もちろん、大人になっても「私だけ損してる」と言い続ける人には、それはそれで深刻な問題があるのだが。

読者のページ

Educo Salon (エデュコサロン)



ご意見・ご感想をお寄せください
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10
教育出版 Educo編集部
FAX: 03-3238-6975
e-mail: nakayoshi@kyoiku-shuppan.co.jp

「森は海の恋人」は、環境教育の単元づくりの導入問題として、本校で教材づくりをしたいと思いました。「どうして漁を営む人が植林に目を向けるのか」ということから、さらには他国の事例を調べることにより、国際社会の中で日本が学ぶべきこと、また実践しなければならないことにまで視野が広がると思います。

「10代の心のカルテ」は、本校でもこのようなタイプの生徒がいますので、筆者の若者に対するカウンセリングのすばらしさを職員研修の場で学びたいと思います。
(神奈川県 金子 肇)

「北から南から」の実践報告には、元気な学校・地域の様子が伝えられており、頼もしく思います。世田谷区教育委員会では「地域・学校連携課」を設置し、放課後の遊び場の取り組みを支援。これからの地域における「教育連携」推進例として共鳴しま

した（本県でも教員OB組織が「子どもの遊び」演出を全県で展開中）。

呉市立渡子小学校の海のカリキュラム開発は、子どもたちの好奇心を高める授業の創造であり、「地球となかよしインタビュー」の畠山重篤さんの「森は海の恋人」にもつながり、共感いたしました。豊かな海と森に包まれた日本の再生を願う思いいっぱいです。
(山形県 佐藤 進)

畠山さんの取り組みは以前からマスコミで見聞きしていましたが、このインタビューで改めてすばらしい発想と環境保全、自然保護に対する理念と情熱を強く感じて、感銘深く読みました。

総合学習に対する新井先生のご指摘は、私も現場で何年も熱心に取り組んでみて、限界を感じた経験からある程度予測してきたことであり、ことに中学校や高校教育での充実には、専門の力ある教員や指導者が

いなくては教育効果はあがらないと今でも思っています。

「いまなぜスクールリーダーか」については、新潟市立総合教育センターが来年度から新規事業として、校長・教頭・教務主任・研究主任研修を統合して、学校課題解決に向けて4者が合同して学校のリーダー層となって、経営に参画していく「学校経営まるごと改善支援事業」を企画するうえでの視点として大変参考になりました。
(新潟県 松田正實)

「ほっとな出会い」の原田選手の記事を楽しく拝読しました。彼は小さい頃から、天才ジャンパーとして注目されていました。幾多の困難を克服しつつ、今なお大きな目標に向かって挑戦しつづける姿に拍手を贈ります。ぜひトリノオリンピックのメンバーとして活躍するよう祈っています。
(北海道 小平邦司)

“「地球となかよし」メッセージ”は、3年目を迎えました。地球上のあらゆる命と自然環境を大切にしようと呼びかけるこの試みは、本年度より環境省、日本環境教育学会、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日小学生新聞・毎日中学生新聞の各団体の協賛・後援をいただき、より広範な取り組みとして新たな一歩を踏み出しました。

2005年7月1日から9月30日までの受付期間中に、海外各地の日本人学校からの応募も含めて、全国から約800点の作品が寄せられました。

昨年10月30日に審査委員会を開催し、それらの作品について厳正に審査いたしました結果、次の通り4作品がそれぞれ環境大臣賞、日本環境教育学会賞、毎日小学生新聞賞、毎日中学生新聞賞に選ばれ、副賞として家庭用プラネタリウムが贈られました。

さらに、入選として15作品が選ばれ、副賞として手作り時計キットが贈られました。

そのほか、学校賞として、常葉学園大学教育学部附属橘小学校と北九州市立曾根東小学校の2校が選ばれ、記念品としてクリスタル製の楯が贈られました。

環境大臣賞



マッターホルンのおたまじゃくし

マッターホルンが見える高さ2000mの湖であそんでいたら、おたまじゃくしを見つけました。水は、はだにしみるほどつめたかった。こんなつめたい湖にも生きものがすんでいるんだなぁと思いました。何年も何年もさむさをのりこえているのがすごいと思います。ほかにもやご、かえる、とんぼを見つけました。

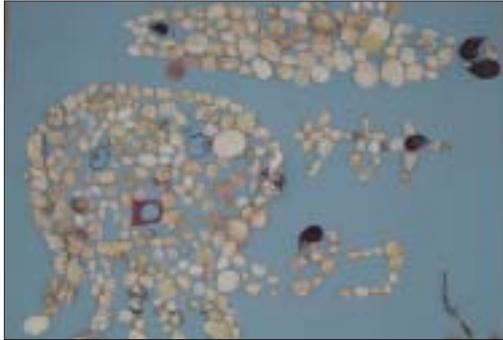
後藤久乃（オーストリア・小学校2年）

【評】...きらきらと輝き、澄みきった水の透明感、手足の先を赤く染めた水の冷たさ、そしてそこに踊る生き物の強さが、みごとに表現されています。地球は、こんなにも美しい星だったんですね。だから、大事にしたい！



審査風景

毎日小学生新聞大賞



海からの贈り物

近くの海に行っているんな勉強をしたよ。さらさらの砂で砂遊びをしたり、生き物探しをしたり・・・貝殻探しもしたよ。きらきら光る貝や、色のきれいな貝。おもしろい形の貝もあったよ。二人で一生懸命集めた貝で、さかなとタコを作ったよ。海の贈り物は僕たちの宝物だよ。

西本悠人・草本友恵（広島県・小学校1年）

【評】..貝がらのタコや魚の造形に、海にとけこみ、一体となって遊んでいるあなたたちのあふれる喜びが現れています。



びるる

ぼかか

日本環境教育学会賞



白いサンゴ

マレーシアのある島の海岸で、白いサンゴを見つけました。海にもぐって見たところ、海の底は白いサンゴだらけでした。

そこで、どうしてこんなに白いサンゴが多いのが調べてみました。すると、その白いサンゴは全部死んでいることがわかりました。サンゴが死んでしまった原因の一つは、海水温が上がったことだそうです。二酸化炭素がふえ、地球が温暖化したことが、サンゴをころしてしまったのです。

きれいなサンゴを守るためにも、二酸化炭素をふやさないようにしたいと思います。小さなことですが、電気を大切にすること、ぼくにできることから始めてみたいと思います。

中山雄一郎（大韓民国・小学校4年）

【評】..白いサンゴに驚き、悲しみ、やがてそれはなぜかと考え、自分を見つめ行動を始めたあなたの姿勢に拍手を送ります。

毎日中学生新聞大賞



サクランボ

校庭の鉄棒のわきに毎年たくさん実るサクランボ、はやく採れば私の勝ちで、サクランボはたちまち甘いシロップになり、時期をはずしたら虫の勝ちで、えさになってしまう。一切農薬を使わないサクランボは、私と虫の勝負の果物だ。私も虫も大好きなこのサクランボは、安心して食べられる。この酸っぱいような、甘いような感じの味は、無農薬の証拠なのだろうか、自然の味がする。

この味を日本で、私は感じられることが出来るのだろうか。私はこれからの世界で、自然の味を感じながら過ごせるのだろうか。この味を忘れずに。

大高さくら（ルーマニア・中学校3年）

【評】..「私」と「虫」と「自然の味」の関係こそが、環境と関わる原点だと、できあがったシロップの写真が訴えています。

【審査委員】(敬称略)

有田和正	教材・授業開発研究所代表
角屋重樹	広島大学教授
小澤紀美子	日本環境教育学会会長・東京学芸大学教授
児島邦宏	東京学芸大学教授
渋谷晃太郎	環境省環境推進室室長
梁瀬誠一	毎日新聞「教育と新聞」推進本部 こども・文化研究所長
中島潮	教育出版教育研究所



「地球となかよし」メッセージ 2005

入選



つばめの巣

電車の駅のとけいの上に、つばめの巣があったよ。おかあさんつばめがもってきたえさを、とりあいていたよ。巣がなくなってたけど平気かな。たぶん、巣だちをしたみたい。ガンバレ駅のツバメ。また、くさなぎ駅に、巣を作ってくれないかな。来年ぐらいに、また、ツバメの巣があったらいいな。ひとり電車をまっていたとき、つばめの子どもたちが、おかあさんを、

「びーびーびーびーびびびー」
といいながらまっていたよ。それで、たいくつしなかったのかなあ。
あの ツバメは、なんで駅のとけいの上に巣を作ったんだろう。森とか、木の上に作ればいいのになあ。

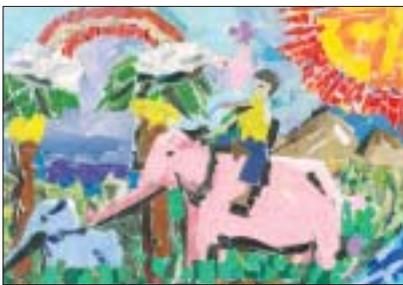
石川沙枝（静岡県・小学校3年）



かなしい別れ

大吉、死なないでよ。
なんで死んじゃったのかな。
古いエサを食べたのかな。
それとも太陽の強い光に負けたのかな。
みんなかなしそうだったよ。
わたしもすごくかなしかったよ。

堀田祐香子（山口県・小学校2年）



象の楽園

「パオーン、パオーン、ウォー、ウォー」今までにない悲しい低い泣き声がひびきわたった。えい画「星になった少年」で、わたしがなみだを流した場面だ。このえい画は、わたしの住むタイの北、チェンマイがぶ台だ。象の楽園を作るのが夢だった少年は、交通事故で死んでしまった。その時、てつを仲間だと思っていた象たちが、そのしゅん間に一せいに泣いたのだ。人と動物の友情にわたしは感動し、この絵をかいた。てつの夢の楽園は、青い空と緑の大地で象だけでなく、人間も、他の動物たちも必要としている場所だ。チェンマイにもこの楽園はもう少ししかない。わたしたちは、消えていく楽園を地球上に残すためにど力していかなくてはならない。

三浦来夢（タイ・小学校4年）



新たな命へ

私には、九つはなれた姉がいます。今、姉のおなかの中には、新たな命がいます。日に日に大きくなるおなかをみたり、病院でちょうおんばであなたのすがたを見たとき、何だかとてもウキウキしました。姉がおなかをさすっているすがたを見ていると生まれてくることがとても楽しみで、命の大切さをおしえてもらったと思いました。
元気に生まれてきてね。

大平彩由（茨城県・小学校4年）



生きてる限りみんな仲間

私がこの絵で1番伝えたかったことは、世界中のあらゆる人たちが仲良く暮らせるようにしていきたいということです。年をとった方も生まれたばかりの赤ちゃんも、障害をもった人も、もっていない人も、いろんな人種の人をもみんな地球上で大切な命をもって生活しています。私は言葉や人種や年齢などいろんなことがちがっていてもみんな話して、理解し合って仲良く生きていける世界にしたいです。そのために私が今できることは身近なクラスの人たちと仲良くすることです。クラスの問題を話し合いで解決したり、みんなで決めたルールを守ったりしていきたいです。誰にでも積極的に話しかけていきたいです。私は、今できることを頑張ります。

有藤 萌（広島県・小学校5年）



みんななかよし

他の国の人たちとも、仲よくやっていけるような地球になってほしいです。

吉田大成（マレーシア・小学校4年）





大切な命

サナギからかえる時に左側の羽を痛めてしまったアブラゼミ。でも、懸命に羽を乾かして飛ぶ準備をしています。縮れていた羽は完全には戻らなかったけれど、次の日無事に飛んでいきました。一週間という限られた命を、夏空の中で楽しんでほしいな。

岩田 楓 (山口県・小学校6年)



きみってすごいね

きみってすごいね 鳥
君は、習ってもないのに
木と木の間に
巣を作るんだから
すごいな

きみってすごいね ホタル
きみは 短いゆみょうの間で
私たちを感動させて
くれるんだから
すごいね

きみってすごいね 竹
きみは クローバーのように
根と根をつないで
仲間をつくるんだから
すごいね

生き物ってすごいね
みんな本当にすごいんだから

西岡優貴乃 (大阪府・小学校5年)



平和を大切に

僕が1番伝えたいことは、地球上の全ての国が平和になって欲しいということです。戦争をしている国や食べ物が無くて飢えに苦しむ国が無くなることを願ってこの絵を描きました。僕はテレビで家も食べ物もない人を見たり、小さな子どもが食べ物を探して道に落ちていっているものを食べたりしている姿を見て世界にはつらい思いをしている人がたくさんいることを知りました。僕は、今できることを考えました。まず学級のみんなど仲間としたり、話し合いを大切にしたりしたいです。その他自分のお小遣いからユニセフの募金をしたいです。

楠戸 真 (広島県・小学校5年)



岩山の小さな生命

岩のあいまから、かわいらしく、堂々と花を咲かせている。植物ってすごいな、こんな岩山で水も無さそうなのに堂々と花を咲かせてる。私もまだつぼみだけど、あんなに堂々と花を咲かせられるかな？人間である私は、環境をこわして平気でいて、あんなに堂々とできないな。植物は何も地球に悪いことしてない。私も植物のような心の持ち主になって植物のとなりにすててあるゴミを捨てるような人になりたい。みんながそうなればいいのにな。

藤原有里沙 (アラブ首長国連邦・小学校6年)



世界中に緑を増やそう

僕たちは、修学旅行でワサバ砂漠に植樹活動をしに行きました。そこは気温45度です。でも、暑い中がんばって、U.A.E.に緑を増やそうと木を植える仕事をしている方がいらっしゃいました。ぼくたちも植樹して記念に木製の看板を立ててきました。暑くてフラフラになりそうでした。緑を増やすことはたいへんだと感じたし、大切にしなければいけないと感じました。みなさんも、緑を大切に、世界中に緑を増やしていきましょう。

中上裕仁 (アラブ首長国連邦・小学校6年)



マングローブを守る

学校でマングローブを植えに行きました。マングローブを植えてカニやエビなどの住みやすい環境を作ってあげました。そう思うと私はとってもうれしいです。これからマングローブがぐんぐん育ってほしいと思います。みなさんも、緑を大切にしましょう。

小澤海樹 (パキスタン・小学校6年)



やさしさ

電車の中で席をゆずったり、重い荷物をちょっと持ってあげたり、笑顔を見せたり。私には色々な人を喜ばせる力がある。小さなやさしさが大きな笑顔につながるかもしれない。その小さなやさしさは人々に大きく影響するかもしれない。やさしさは世界をもっと豊かな場所にしてくれるはず。あなたにもわたしにも笑顔をもっと増えるだろう。人を助ける心、そしてやさしさが世界中に広まっていく。そう信じて手をさしたそう。

青山樹里テルマ (東京都・アメリカンスクール12年)



守っていこう、感覚

私は、夜空を見上げる時、星座が「見えない」と言わせたくない。山へハイキングに行って、鳥の音が「聞こえない」と言わせたくない。水道水を飲ませ、「美味しくないと」言わせたくない。春一番に咲く花の匂いが「分からない」と言わせたくない。緑の丘の上で仰向けになり、暖かい大地を「感じた事が無い」と言わせたくない。自然の風景、音、味、匂い、感触、かけがえのない自然が与えてくれる感覚を残しておきたい。守っていこう、自然。

桑原ラッセル光平 (東京都・アメリカンスクール11年)



田の減少

最近、どんどん田畑が商業施設や、住宅などへ変わってきています。8年前程、私の家の近くは田んぼばかりで、お店や家は、少ししか建っていませんでした。5年ぐらい前から田んぼだったところにお店ができました。今では、田んぼは少しになり、家の周りは、お店がたくさんあります。田畑では、植物を育てているので、植物が地球温暖化の原因と言われる二酸化炭素を光合成で酸素に変えてくれます。その田畑は、最近、たくさん減少し私の家の近くでも減っています。私は、地球温暖化は、二酸化炭素の増加という原因の他にも、このように自然や田畑が減るのも原因ではないのかな、と考えました。

笹原明日香 (熊本県・中学校2年)



なぜ、男が女を演じるのか

中村芝雀さん(歌舞伎俳優)

◎芝雀さんは、人間国宝で文化勲章を受章した四代目
中村雀右衛門の二男として生まれる。

最初は六つの時に初舞台を踏んで、九歳の時に中村芝雀を襲名したのですが、小さい時からこの世界にとっぷりつかっていると、楽屋に流れている音や先輩の台詞などが自然と体に馴染んでくるんですね。知らない間に身につけてきます。以前は女形は子どもの時からおはじきやお手玉を使わせて育てたといいますが、それは地の芸といって女形の根本になる部分を身につけるための修行のひとつなんです。

このように馴染むということはこの世界ではとても大切なことなんです。子役の時から芝居になれ親しみ、単に父親としてではなく、歌舞伎の大先輩としての父を尊敬し、目標としていきたいと思った時、自分の人生の行く末を覚悟したように思います。

◎芝雀さんが女形を目指すためにまず行ったのは、ダイエットだった。

私は子どもの頃は肥満児だったんです。それで一八歳の時、20kgばかりダイエットをしました。当時、まだ立役でいくのか女形でいくのか絞りきれないでいましたが、「女形は美しくないといけない」との先輩のお言葉で奮気し、現在に至っています。

歌舞伎は一六〇三年に始まったといわれますが、最初は出雲の阿国という女性が始めたのです。ところが、風紀を乱すとして幕府が女性の演者を禁止したため、代役として男性が出るようになり、年を経るごとに代役が本役になりました。こうして女形が生まれ、さらにそれが進化して、より美しく、より優美に女性を表現し、男性がやって初めてその存在感が出てくるような現在の女形が創り出されてきました。



真女形として歌舞伎座を中心に活躍。2006年1月3日より国立劇場での「首我梅菊念力強」に出演。

例えば、「助六」というお芝居に登場する場合はその典型で、あのデコラティブな頭の重さが5kg、衣装が30kgくらいあるんですよ。それに下駄が3kgくらいあって、女性だと骨格が細いから重さに負けてしまいます。華やかな中にも過酷な衣裳の現状、様々な変化もありながら女形というものが確立され、歌舞伎という文化が伸びてきたのかなという気がしますね。

◎歌舞伎は日本の誇る文化であることは広く知られているが、そのおもしろさやよさを知る人は多くない。

から歌舞伎を見てもらえたら、きつと多くの方々から親しんでもらえるようになると思います。確かに、初めて歌舞伎を見ると、難しいと感じるかもしれませんが、黒子は「黒い格好をしているから見えないものだ」とか、一定の約束事がありますが、そんなに複雑なものはないですよ。ですから、何回か重ねて見たら自然とおもしろさがわかってくるのではないのでしょうか。なぜなら歌舞伎はそもそも庶民の中から生まれた文化ですから。

◎歌舞伎を守り大切に育てていくために、芝雀さんは普及活動にも力を注ぐ。

歌舞伎に限らず日本の伝統文化というのは、まず触れてもらうことが大切だと思つてます。触れてもらうことによって文化の受け継ぎもできると、文化の担い手も育っていくと思います。そこで、子どもたちに歌舞伎の楽しさにふれていただくために、伝統歌舞伎保存会が毎年夏に、東京で歌舞伎体験教室を開催しています。楽しく遊びながら歌舞伎の世界にふれることができるワークショップや、歌舞伎を鑑賞し、舞台裏を見学できる鑑賞教室、さらに自分で歌舞伎を演じる体験教室などのプログラムを用意しています。

小さい時から生まれ育つたふるさとの文化、例えば子どもの頃のお祭りなどは何となく懐かしく、大きくなってそれを受け継ぐことと思つていないですか。それと同じように、子どもの頃からお父さんやお母さん、おじいさんやおばあさんに連れられて歌舞伎を見て来てくれていると、大きくなってからお芝居を見ても、自然とその世界に入っていけるような気がするんですよ。今は核家族社会で、そういう環境がだんだん薄れているのが残念ですが、小さいうちから

でも地方から来ていたわけにはいかないのです。歌舞伎体験教室の地方版を開催できたらいいですね。大規模なものではなく大変ですが、学校単位で、邦楽の授業などと上手にかみ合わせながら、地方の子どもたちが歌舞伎と出会う場をつくりたいと思います。

我々の普及活動がきっかけとなって、各地の地芝居など伝統芸能の復活につながっていけば、歌舞伎をやっている我々にとってもこんなにつれしいことはありません。

導要領にどのように反映されるのか、改訂の方向性に注目したいと思います。

中野良子さんといえば、「女房酔わせて、どうするつもり」というあのCMの色っぽい台詞が思い浮かびますが、国際交流や地球環境の保全など、地球市民としての精力的な活動について熟っぽく語る素顔の中野さんも、大いに魅力的でした。

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

新年おめでとうございます。本誌は、本年も「地球となかよし」をコンセプトに、人と人との共生、そして人と自然との共生を追求し続けてまいります。忌憚のないご批評をお願いいたします。

中央教育審議会による教育課程の基準の見直しが大詰めを迎えています。この間の「学力低下」をめぐる論争が学習指